梅花女子大学看護学部紀要
第５号（2015年３月20日刊）抜刷

2014年度国際看護学演習におけるオーストラリア海外看護研修報告
梅花女子大学オリジナル海外研修プログラム企画の試み

The Report of Global Health Nursing Overseas Practicum in Australia: Developing an Original Overseas Nursing Program at Baika Women's University

田　代　麻里江
張　暁　春

2014年度国際看護学演習におけるオーストラリア海外看護研修報告：梅花女子大学オリジナル海外研修プログラム企画の試み

The Report of Global Health Nursing Overseas Practicum in Australia: Developing an Original Overseas Nursing Program at Baika Women's University

田　代　麻里江 [1)]　　張　　暁　春 [1)]
TASHIRO, Marie　　ZHANG, Xiaochun

キーワード：海外看護研修　国際看護　多文化看護　オーストラリア プログラム企画
Key words：Overseas Nursing Practicum, Global Health Nursing, Multi-cultural Nursing, Australia, Program designing

要　約

梅花女子大学の海外看護研修は、4年前期選択科目である国際看護学演習の一環として実施しており、研修先は、初年度に引き続き2014年度もオーストラリアのモナシュ大学であった。しかしながら2014年度は、モナシュ大学の研修プログラムに加え、梅花女子大学オリジナルの研修を取り入れる試みを行った。国際看護学演習科目担当教員の国際的なネットワークを生かし、オーストラリアの看護職者による講義と交流のプログラムを企画し、学生たちの潜在能力を引き出すための学生主催の企画等の機会を提供した。その結果、この梅花女子大学オリジナル・プログラムに対して学生たちの高い満足感と成長の成果が見られた。そこで、この海外看護研修における本学オリジナル・プログラムを振返り学生の意見も踏まえた評価を報告する。

Ⅰ．はじめに

梅花女子大学の海外看護研修は4年前期選択科目である国際看護学演習の一環として実施している。2014年度は、看護学部開設以来2回目の海外看護研修となった。2013年度に引き続き研修地をオーストラリアとしたが、昨年利用したモナシュ大学の研修プログラムに加え、梅花女子大学独自の研修も取り

1）梅花女子大学　看護学部　看護学科

入れる試みを行った。そこで、このオーストラリアで実施した梅花女子大学オリジナルのプログラム企画を中心に、2014年度海外看護研修の報告をする。

Ⅱ．国際看護学演習の科目概要および履修要件

国際看護学演習の学習目標は、「異なる文化圏での研修を通して、看護をグローバルな視点から概観するとともに、社会文化システムの看護との関係性について理解を深めること」である。授業は、渡航前学習・海外看護研修・帰国後学習の3部構成となっている。

国際看護学演習の履修には、多文化共生看護学と国際看護学の2科目の選考履修要件を課している。この2科目の講義、グループワーク、国内フィールドスタディの集大成として国際看護学演習がある（表1）。その他の要件として2014年度は、英語自己学習（TOEFL-ITPスコアの提出）、英会話レッスンを課した（表2）。渡航前学習・帰国後学習の詳細については表2に記した。なお、英会話レッスンについては、本学の食文化学部で英語関連科目を担当する教員の協力を得て、渡航前に計11回のグループレッスンを実施し、日常会話、自己紹介、日本食料理の作り方など非常に実践的な英会話学習を行った。

表1　梅花女子大学の看護専門分野における国際教育プログラム（2014年度）

開講時期	科目名	単位数	必修／選択
3年前期	多文化共生看護学	2	選択
3年後期集中	国際看護学	2	選択必修*
4年前期集中	国際看護学演習**	2	選択

*選択必修：卒業要件として「国際看護学」あるいは「災害看護学」のいずれかを選択すること
**履修要件：多文化共生看護学と国際看護学を修得していること

Ⅲ．2014年度海外看護研修の概要

2014年度の海外看護研修は、学生9人と科目担当教員2人の合計11人で実施した。研修の概要を表3に記す。

Ⅳ．梅花女子大学オリジナル海外研修プログラムの実際

2014年度の海外看護研修は、梅花女子大学オリジナル海外看護研修プログラム（以下、オリジナル・プログラムとする）を、モナシュ大学のプログラム開始前の3日間を用いて実施した。オリジナル・プログラム内容は4つの企画からなり、以下に説明する。

1．オーストラリア・ナース・クリスチャン・フェローシップのメンバーによる講義・交流

1）現地のカウンターパート

ナース・クリスチャン・フェローシップ・インターナショナル（NCFI）は50年の歴史を持ち、36の正式な加盟国と10の加盟準備国を有する国際的な看護職団体である（NCFI, 2014）。4年に一度の国際カンファレンスにて加盟国が学術会議と交流会を持っている。国際看護学演習の科目担当教員である第一著者（田代）は、日本ナース・クリスチャン・フェローシップのメンバーであることから、国際カンファレンスを通して交流のあったオーストラリア・ナース・クリスチャン・フェローシップのリーダーに打診し、梅花女子大学独自のプログラムをオーストラリアで実施する計画を相談した。現地では、Rosemary Bulman氏がコーディネーターを引き受けて下さり、同じくメンバーであるPat Pither氏とJanine Adam氏の協力を得て今回のプログラムが実現した。

2）プログラム内容

(1) ロケーション

海外看護研修の現地到着の翌日2014年3月17日11：00から14：30までの時間、Bulman氏の自宅の居間にてプログラムを行った。Bulman氏の自宅は、モナシュ大学ペニンシュラキャンパスのあるフランクスト

表２　２０１４年度　国際看護学演習のオリエンテーション・渡航前学習・海外研修・帰国後学習

	月	日	学習・準備　内容	英語学習
説明会&準備	2013/9	27	海外研修説明会①　研修概要説明	
		8	海外研修説明会②　研修申込み手順と今後の予定	11/18　TOEFL-ITP受験申込
	11	20	海外研修説明会③　費用＆今後の予定 ホームステイ申込書提出･学生チーム役割分担	
	12	7	海外研修説明④　渡航関連書類提出 学生チーム役割分担と作業	1/7　TOEFL-ITPオリエンテーション&勉強会 1/11　TOEFL-ITP受験
	2014/1	14	海外研修説明会⑤　学生主催メルボルン研修行動計画	
		24	海外研修説明会⑥　学生主催メルボルン研修行動計画	2/12　TOEFL-ITP成績提出
渡航前学習	2	12	国際看護学演習(学内)オリエンテーション 渡航前事前学習の説明 国際看護学履修動機のエッセイ提出	2/12　英会話レッスン① 2/13　英会話レッスン② 2/17　英会話レッスン③ 2/19　英会話レッスン④ 2/20　英会話レッスン⑤
	3	3	国際看護学演習(学内) ･オーストラリア＆メルボルンの概要 ･オーストラリア医療指標･医療事情､看護事情	3/3　英会話レッスン⑥ 3/4　英会話レッスン⑦ 3/6　英会話レッスン⑧ 3/7　英会話レッスン⑨ 3/10　英会話レッスン⑩ 3/11　英会話レッスン⑪
		4	国際看護学演習(学内) ･オーストラリアの多文化医療 ･オーストラリアの生活､治安､ホームステイ成功の秘訣､必携品リスト	
		6	国際看護学演習(学内) ･モナシュ大学の概要､ペニンシュラキャンパス概要､看護助産学科の概要 ･フランクストン＆モーニントン地域の概要･交通機関	
海外看護研修		15-25	国際看護学演習(海外)	
事後学習	4	9	国際看護学演習(学内)振返り＆評価 国際看護学演習(学内)報告会準備	
		10	国際看護学演習(学内)報告会準備	
		11	国際看護学演習(学内)報告会準備	
		15	学内報告会(主に2年生向け)	
		18	学内報告会(主に3年生向け)	
		25	演習記録提出 海外研修奨励金報告書提出	

表３　２０１４年度 国際看護学演習　海外研修スケジュール

日　程	場　所		研修内容
3/15(土)	日本を出発		16:25　関西国際空港　集合 18:25　関西国際空港　CX507出発 21:00　香港国際空港　到着 23:45　香港国際空港　CX105出発
3/16(日)	梅花女子大学オリジナルプログラム	メルボルン空港到着	14:05　メルボルン空港　到着 バス･列車にてフランクストン市へ移動 18:00以降　Quest Frankstonに宿泊(学生同士　ルームシェア)
3/17(月)		グレンアイラ	11:00-14:30　オーストラリア･ナース･クリスチャン･フェローシップ･メンバーの講義･交流 15:30-17:00　Grehan博士によるビクトリア州立図書館ツアーと講義 18:00以降　Quest Frankstonに宿泊(学生同士　ルームシェア)
3/18(火)		メルボルン	9:00-17:00　学生主催　メルボルン市内研修メルボルン移民博物館見学 聖パトリック大聖堂　等 18:00以降　Quest Frankstonに宿泊(学生同士　ルームシェア)
3/19(水)	モナシュ大学プログラム	モナシュ大学	9:00-11:00　オリエンテーション･キャンパスツアー･歓迎パーティ 11:30-13:00　英会話レッスン 14:00-15:30　講義1　オーストラリアヘルスケアシステム 15:40-16:30　ホストファミリーに迎えてもらう
3/20(木)		フランクストン病院 モナシュ大学	9:30-11:00　病院見学 14:00-15:30　講義2　文化と看護
3/21(金)		モナシュ大学	9:00-11:00　講義3　オーストラリア先住民の健康(1) 11:30-13:00　講義4　オーストラリア先住民の健康(2) 14:00-15:30　モナシュ大学の看護学生と交流
3/22(土)		メルボルン周辺	ホストファミリーと自由行動
3/23(日)		メルボルン周辺	ホストファミリーと自由行動
3/24(月)		モナシュ大学	9:00-11:00　モナシュ大学看護助産学科　授業見学 11:30-13:00　グループワーク及び全体の振り返り 14:00-15:30　研修終了式･ホストファミリーとの送別会 23:40　メルボルン空港　CX178出発
3/25(火)	日本に帰国		7:00　香港国際空港　到着 10:30　香港国際空港　CX506　出発 14:50　関西国際空港　到着

ン市から列車で約20分のところにありアクセスが良かった。学生と教員は列車で移動し、Bulman氏らが最寄り駅から自宅へ車で送迎をして下さった。Bulman氏宅は、居間に学生と教員合計11人が座っても余りあるほどの大邸宅であった。

写真１　Rosemary Bulman氏（中央後）Pat Pither氏（中央前）張（左後）田代（右後）

写真２　オーストラリア・ナース・クリスチャン・フェローシップの３人を囲んで自己紹介をする学生たち　（左端よりPat Pither氏、Rosemary Bulman氏、Janine Adam氏）

(2) 歓迎 & 挨拶

Bulman氏宅では、はじめに飲み物のおもてなしがあり、その後Bulman氏、Pither氏、Adam氏と学生、教員が円を描くように着席し、英語で自己紹介をした。学生たちは渡航前の英会話レッスンで自己紹介の練習をしていたが、この時に生まれてはじめて英語のネイティブスピーカーと話をしたという学生もいた。その後、この３人からオーストラリアの看護についてご自身の経験をふまえた講義があり、第一著者が通訳をした。

(3) 講義

Pither氏は定年退職をされた看護師であり、ご自身の経験を元にオーストラリアの看護と看護教育の変遷を話された。Adam氏は40代の現役看護師であり、公立病院の心臓外科病棟に勤務している。生死と常に隣り合わせの患者とその家族を看護する経験から、ターミナル期の患者と家族には文化背景によってさまざまな死生観があること、スタッフの間にも文化背景の違いにより倫理観に違いがあること、心臓外科系の患者にもスピリチュアルケアが日々欠かせないものであることを話して下さった。Adam氏自身がキリスト教の信仰を持っていることから、患者のスピリチュアリティに対して常に大きな関心をもって看護をしているということだった。Bulman氏はニュージーランドの出身でオーストラリアに移住して四半世紀を経ている50代の現役看護師である。予防接種と訪問看護を行える資格を持つ公衆衛生看護師で、主に市の公衆衛生サービス機関で働いている。オーストラリアの看護師は、大学卒業後も様々な資格を取るコースが用意されており、Bulman氏も公衆衛生看護に関する資格を一つ一つ積み重ねてきたとのこと。Bulman氏の経験談を通して、学生たちはオーストラリア看護師のキャリア形成システムを学ぶことができた。講義後、オーストラリアの看護師のキャリアアップ・システムや患者の文化や信仰に配慮したスピリチュアルケアの実際、安楽死に対する考え方などについて学生からの質問があり、活発なディスカッションとなった。

写真３　Bulman氏、Pither氏とともに

写真４　Bulman 氏のティーパーティーにて

(4) ティーパーティー

オーストラリアでは、お茶と軽食を戴く時間をティー（Tea）を呼ぶ習慣がある。この日は、Bulman 氏らが、サンドイッチ、巻きずし、フルーツ、スイーツなどを用意しもてなして下さった。また、グリーンティー（緑茶）を用意するなど、私たち日本人への配慮が感じられ、多民族国家に生きる看護師が身につけている他文化尊重の思いを垣間見ることができた。

２．Grehan 博士によるビクトリア州立図書館ツアーと講義

１）現地のカウンターパート

メルボルン大学名誉教授 Madonna Grehan 博士は、現在ビクトリア州立図書館特別研究員でもある。Grehan 博士は、看護と助産のほかに、19 世紀オーストラリアの女性史、第二次世界大戦中の従軍看護師、戦争と災害及び女性の健康政策に関する研究に携わっている。国際看護学演習科目の担当教員である第二著者（張）は、2014 年 2 月神戸で開催された災害看護国際学術雑誌「Health Emergency and Disaster Nursing, HEDN」の創刊記念セミナーで Grehan 博士と知り合い、今回のプログラム企画を依頼し快く引き受けて頂くことができた。

２）プログラム内容

(1) ロケーション

ビクトリア州立図書館（State Library of Victoria）は 18 世紀に建設され、メルボルン市中心部のスワンストン・ストリートに位置し、オーストラリアにおいて歴史のある図書館の一つである。誰でも無料で入館することができ、本の閲覧からインターネット、無料のギャラリーも設けられており、多くの学生や市民にとってなくてはならない学習の場でもある。訪問時は平日にもかかわらず、多くの学生が州立図書館で勉強する場面も見受けられた。

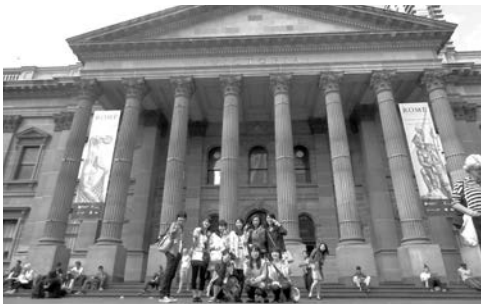

写真５　ビクトリア州立図書館前にて

写真６　ビクトリア州立図書館の内部の様子

(2) ビクトリア州立図書館ツアーと講義

2014 年 3 月 17 日 15:30 から 17:00 にかけて、このプログラムを実施した。州立図書館では、Grehan 博士が展示物を案内しそれらを教材として用いながら、州立図書館の歴史、オーストラリアの自然災害の歴史、オーストラリアの女性の歴史及び看護と助産の歴史について、学生に講義を行った。通訳は第一著者が担当した。学生たちは熱心に講義を聞き、はじめて学んだオーストラリアの自然災害や、看護および助産の歴史と女性史の関連性について興味を示し積極的に質疑応答を

していた。講義後、Grehan 博士のご主人も加わり、学生と交流を深める時間を持った。

写真７　ビクトリア州立図書館でオーストラリアの歴史を描いた絵画をもとに講義される Grehan 博士

写真８　移住博物館

写真９　移住博物館の日本人移住者に関する展示

３．学生主催メルボルン市内研修

海外看護研修の現地到着後２日目の３月18 日は、学生が主体となって企画・行動する研修をメルボルン市内で行った。学生たちは、渡航前の１月より何度も集まり自分たちが訪れたい史跡や施設を選んだ。特に行動計画リーダーとなった学生たちは、ビクトリア州交通局の英語のホームページを活用して、滞在場所のフランクストン市からメルボルン中心街まで、そして限られた時間内にそれぞれの場所を効率よく回るための交通経路と利用する交通機関を選び、一日の行動計画と移動のタイムテーブルを作りあげた。学生たちが選んだ訪問先は、移住博物館、クイーン・ビクトリア・マーケット、聖パトリック大聖堂、パーラメント・ガーデンであった。

訪問先の中でも移住博物館は、オーストラリアの先住民の歴史や移民社会について学生たちの理解を助けるよい教材であった。この博物館の建物は旧税関である (Immigration Museum,2014)。ビクトリア州メルボルン市中心部フリンダース通りの近くに位置し、オーストラリアの移住史を扱っている。展示品や視覚メディアの上映を活用し、オーストラリアの移民の歴史が２つのフロアにわたって展示され、各国ごとの移民の歴史、人口、職業などがタッチパネル方式で説明されていた。日本人移民についての展示もあり学生たちの関心を引いた。展示物やメディア情報の通訳は第二著者が担当した。

写真１０　学生主催メルボルン市内研修で地下鉄を乗りこなす

５．ルームシェア

2013 年度の海外看護研修では、学生たちは全日ホームステイを体験したが、今回のオリジナル・プログラム期間は、アパートメントと呼ばれる長期滞在型ホテルに学生全員が滞在した。２－３人用の各部屋にバス・トイレ・キッチンがついており、隣り合う２つの部屋が内部ドアで行き来できる構造になっている。そこで、学生たちは４人と５人の２チームに分かれて３泊４日を過ごした。この間は完全に自炊であり、学生たちはチームごとに献立や調理当番を話し合い、近所のスーパーマーケットへ買い出しに行った。チームメンバーと朝夕の食事準備、バス・トイレのシェア、日々の記録や学習を共に行い、大学

では表面的にしか知らなかった者同士が、共同生活で生じる問題に取り組みながらも、これまでにない深い結びつきを育んだ。

写真11　ルームシェアで寝食や学習をともにする

III. 学生が海外看護研修を通して得た学び

今年度の新しい取り組みである、梅花女子大学オリジナル看護研修プログラムから得た学びについて、学生の許可を得て、日々の演習記録から以下に抜粋する。

1．ナース・クリスチャン・フェローシップ・メンバーの講義・交流

・Rosemary さん、Janine さん、Pat さん、みなさんが快く迎えて下さり、わかりやすくオーストラリアの歴史・文化、看護事情、医療事情を教えて下さり、その優しさがとてもうれしく感じた。

・Janine さんのお話しの中で、オーストラリアでは様々な民族の人が生活しているため、安楽死についてもその人の文化背景により様々な考え方があることを学んだ。日本では患者の家族の意向を尊重することが多いが、こちらでの講義を聞き、人の生死に関わることについては、人それぞれ異なる考えがあるため本人の意向を尊重するべきであると考えるようになった。

・慢性疾患を持つ患者には特に、その個人の文化的背景などを考慮し、どういった看護が必要かを常に考えておくことが大切だと学ぶことで来た。今回のお話しで特に印象に残ったのは、「終末期における看護」で、やはり看護のどの場面でも「傾聴」が大切な看護アプローチであることを確信した。

・Rosemary さんのお話しから、オーストラリアやニュージーランドといったイギリス連邦諸国では看護師免許が互いの国で認められ就労できることを学んだ。また看護師が予防接種や訪問看護を独立して行うためにそれぞれに資格がいることは日本との違いであり興味深かった。

・スピリチュアル看護の話しでは、オーストラリアは多民族国家であるため様々な考えがあり、そのため１人１人患者の話しを傾聴することがより重要となってくる。スピリチュアル看護は日本の看護においても必要なことだとだと感じた。

・3 人のお話しを聞き、クリスチャンはとても信仰が深いのだということを感じた。私がこれまで実習で何人かの患者さんを受け持ったが、信仰深い人はいなかった。日本人はあまり信仰深い人が少ないのではないかと思う。オーストラリアのように多文化かつ信仰深い人がいる地域では、宗教に対する配慮を特にしなければならないだろう。

2．Grehan 博士によるビクトリア州立図書館ツアーと講義

・州立図書館の見学、講義及び Grehan 博士との交流を通して、オーストラリアの歴史、女性の歴史及び自然災害の歴史に触れることができ、女性の存在が社会、家庭及び子どもにとって大きな意味をもっていることに気づく機会となった。

・異なる文化を理解するには、まずその文化の歴史を知ることの大切さを理解した。

・Grehan 博士は私たちにわかりやすいように合わせて話して下さったので、私は英語の文章としては話せないけれど、単語でコミュニケーションをとることができたの

で、もっと自分から話してみようという自信につながった。

4．学生主催のメルボルン研修

・誰一人行ったことのない土地での行動計画を、インターネットを駆使し英語の壁を乗り越えて渡航前に作り上げる苦労や、現地で実際に自分たちが計画したことがうまくいかない時フレキシブルな対応を迫られたが、チームワークをもってそれらを解決した。この経験を通して、自主性、チャレンジ精神、行動力、団結力を養うことができた。

・メルボルン市内ツアーの時、行動計画・引率リーダーとしてみんなを引っ張って行くことができ、英語にも慣れることができた。そしていろんな場所を回ることができて、日本では見られない綺麗で興味深いものが沢山あることを発見できた。

・移住博物館においてオーストラリア先住民（アボリジニ）について深く学ぶことができた。アボリジニは、オーストラリア大陸に後から渡って来た西洋人から差別をうけ闘争へと発展していった。1800年代のこのようなオーストラリアの歴史を知り、現在は民族を超えて平等な社会が築かれているが、それまでにはこうした人間同士の争いが行われていたことを学んだ。

・アボリジニの歴史について、英語で書かれた説明は十分に理解できなかったが、写真に映っている人々の表情などから、当時の辛い体験を知ることができ深い学びとなった。

5．ルームシェア

・毎日の行動記録を完成させるため、同室の学生たちと一緒に勉強をし、1日の行動と学びを振り返り、ディスカッションを行い各自の学びを深めることができた。

・食事の買出しや支度を含めて、学生同士がお互いのことを配慮しながら協力しあい、ルームシェアでの生活を楽しく体験したことで、学生個人にとって今まで以上に交流ができ、絆を深めた。

・お互いに声を掛け合って水分摂取や食事などで調節し健康管理ができるように協力することができた。

Ⅴ．研修プログラムの評価および自己評価

1．学生によるプログラム評価および自己評価

海外看護研修からの帰国後8日目に、研修についての無記名アンケートによるプログラム評価と自己評価を履修学生9人に対し実施した。表4にその結果の概要を記す。

2. 学生のプログラム評価および自己評価に対する教員の考察

今年度の海外看護研修の特徴は、梅花女子大学独自のプログラムをモナシュ大学のプログラム開始前の3日間に実施したことである。オリジナル・プログラムでは4つの新しい企画を行ったが、学生たちの評価によると、教員が意図した以上の収穫であったことがうかがえた。

オーストラリア・ナースクリスチャンフェローシップ・メンバーの講義・交流は、3名の現地のナースの協力により図らずも3世代の現地ナースよりお話しを伺う機会を得られた。このことは、学生たちにとってオーストラリアの看護ならびに看護教育の歴史と変遷を学ぶ大変貴重な機会となった。また、多民族国家であるオーストラリアの看護実践現場で、常に課題となる価値観・宗教観の違いについて具体的な事例から学ばせて頂いた。信仰深い3人のクリスチャン・ナースからの講義を通して、スピリチュアルケアがターミナル期だけにとどまらず、急性期から慢性期までのあらゆる場面で必要であることも学ぶことができた。

このプログラムを通して何よりも学生たちは、3人の看護師の深い配慮や心のこもった

表４　学生によるプログラムの評価・自己評価　（評価基準：1.0=不満足～4.0=満足）

評価項目	平均スコア	主なコメント
研修場所		
オーストラリア	4.0	多民族国家のため多文化看護の学びとして最適であった／はじめての海外だったので治安のよいところで良かった／モナシュ大学の先生も丁寧だった
モナシュ大学看護助産学科	4.0	
平均	4.0	
研修時期		
3月15日－3月25日	2.8	期間が短かった（複数）／ちょうどよい長さであった
ホームステイ　3月19日－3月24日（5泊6日）		
ファミリー	3.7	プライバシーに配慮してくれた／愛情をもって接してくれた／交通の便も良かった／家族はいい人ばかりだった／平常どおりの生活で特別なことはしてもらえず少しさみしかった
ホームの環境	3.8	Wifiがないことが不自由だった
土日の過ごし方（ホストファミリー）	3.1	希望を聞いてもらえた／自分のしたいことを尊重してくれた／
平均	3.5	
梅花女子大学オリジナル・プログラム		
ナース・クリスチャン・フェローシップ・メンバーの講義・交流	3.7	3世代の看護師から話しを聞ける貴重な機会だった（複数）／内容的に満足だがもっと時間がほしかった／現場の生の声が聞けた／おもてなしがよかった／内容的に満足だが自分が英語のコミュニケーションに慣れていなかった
Grehan博士による講義	4.0	オーストラリアの歴史を知ることができた／わかりやすい図書館ツアーをして頂けた／内容的に満足だがもっと時間がほしかった／英語の交流がたできてよかった／講義で知識が深まった
ビクトリア州立図書館ツアー	3.8	
平均	3.8	
学生主催　メルボルン研修		
移民博物館	3.9	全く知らない土地を調べるのは大変だったが、楽しく観光できた／とても楽しかった／効率よく行動するための準備は大変だったがすべて回ることができた
ルームシェア　3月16日－3月19日（3泊4日）		
アパートメントの設備・環境	3.7	とても楽しく生活できた／学生同士の生活で絆が深まった／いきなりホームステイだと緊張してしまうのでホームステイの前にワンクッションあってよかった／5人部屋で少し気を遣った／メンバーチェンジもしてほしかった
学生同士の生活について	3.8	
平均	3.7	
講義以外のプログラム		
オリエンテーション／キャンパスツアー	3.8	大学を知ることができ後に迷子にならずにすんだ
ファミリーとのお別れ会	3.6	ファミリーに感謝の気持ちを伝える場を与えてくれてよかった／感動的だった／事前準備期間がもう少しほしかった／渡航前に準備する必要がある
平均	3.7	
講義		
オーストラリア英語の会話レッスン	3.6	分かりやすく楽しかった／レッスンにより自信につながった／もっとしてほしかった／実際に習ったフレーズは使わなかった
オーストラリアのヘルスケア制度	4.0	日本との違いを学べた／自分たちの事前学習がとても役に立った
文化と看護	4.0	文化も看護に大きく影響すると学んだ／
オーストラリア原住民の健康	3.8	もう少し歴史についても知りたかった
研修全体のふりかえりセッション	3.9	学びを共有できてよかった
平均	3.8	
モナシュ大学　学生交流・授業見学		
看護学生との交流（3人の看護学生とのフリーディスカッション）	2.9	自分たちの学習環境との違いを具体的に比較できた／もっとお話しがしたかった／学生の思いや実習時の過ごし方など素直な意見が聞けた／もっと他の学生とも交流したかった
授業見学：看護学概論	3.2	現地の看護学生の学びの環境を知ることができた／事前に授業資料を渡してもらえればもう少し授業が理解できた／英語だったのであまりわからなかった
平均	3.0	
施設見学・授業見学		
フランクストン病院	3.8	日本との違いを具体的に比較してみることができた／もっと詳細な訪問がよかった／一つの病院だけしか見ていないのでオーストラリアの特徴が分かりにくかった
費用　24万円＋奨励金7万円		
	3.6	大学奨励金がありとても助かった（複数）／妥当である
プログラム評価　全体平均	3.7	
自己評価		
多文化理解／他文化理解	3.8	今まで他文化について考えたことがなかったが実際に触れることができた／もっと他の文化についての学びが必要と思った
自文化理解	3.6	他文化に触れて自文化を理解することができた／日本のことを客観的に見れた／自文化についてもっと勉強したいと思った
英語力／コミュニケーション力	3.4	簡単な英語やジェスチャーでコミュニケーションはとれたが英語力はまだまだだと思った／様々な方法でコミュニケーションが行えると学んだ／全く話せなかったのに最後には店で買い物できるレベルの英語力が身についていた／話そうとする姿勢が身についた
協調性／チームワーク	3.9	皆で助け合って行動ができたと思う／チームメンバーのことを常に考えながら行動できた
自立心	3.7	1人でホームステイすることで人に頼りすぎることなく生活できた（複数）
積極性	3.4	ファミリーや現地の人に興味をもち積極的にかかわれた／もっと積極的に質問できればよかった／自ら質問したり行動したりすることの大切さを学んだ
全人的成長	3.8	日本以外の世界を知ることで人として大きく成長できたと感じる／相手の生活に合わせることを身に着けた／行く前と比べだいぶ成長できたと思う
自己評価　全体平均	3.7	
総合平均	3.7	

おもてなしを受け、はじめて出会うオーストラリアの人々に対する緊張がほぐれ、以後に続く研修への良い導入となった。学生の満足度は高かったが、現地到着直後のため、英会話に慣れていなかったことで、貴重な学びの機会を十分に自分のものにできなかった、あるいは積極的に会話する習慣が身についていなかった、という学生の声もきかれた。今後は、学生が現地にある程度慣れた研修の中期に、このような現地ナースと触れ合う機会を設けるよう心掛けたい。

ビクトリア州立図書館のツアーと講義については、Grehan 博士が看護教員であり、過去に様々な国のカンファレンスに参加した経験等を持つことから、英語がネイティブでない学生に対して話をされることに慣れている方であった。そのため、英語に不慣れな学生たちにとって「とてもわかりやすい講義だった」と大好評であった。Grehan 博士が州立図書館の研究員であることから図書館を周知しているため、館内の博物館・美術館の歴史的な展示物を用いて、オーストラリアの歴史や女性と看護の歴史について、具体的で楽しい講義を聞くことができた。学生たちの唯一の不満は、プログラムの時間が短かったということであった。

学生主催のメルボルン市内研修の企画については、事前学習期間にまず学生の中からリーダーを 4 人選出した。4 人は参加者全員の意見をくみ取り、土地勘の全くないメルボルンの複数の場所をいかに効率よく回り日没までに宿泊場所に戻るかというツアーの組み立てに挑戦した。準備をする中で、英語が全くできないと自分の能力を決めつけていた学生が、必要に迫られて英語の地図を読み取り、ビクトリア州交通局の英語のホームページの解読を始めた。最後には 11 人全員に装丁を整えたパンフレットを作成して渡してくれた。現地でも地図を片手にチームをリードし道案内をした。準備に取組んだ 4 人をはじめ学生全員が、この経験を通して自らの潜在能力や可能性に気づく経験となり、学生たちの成長は目を見張るものがあった。

移民博物館は、先住民の歴史やオーストラリアの多民族社会の様子を学ぶ場としてふさわしい場所であったが、展示物の説明がすべて英語であった。その為、教員が通訳をしたり、学生間で教え合ったりしていたが、理解するのに困難さを覚える学生もいたことが残念であった。学生の語学力を考慮した見学の方法を検討する余地があると感じた。

ルームシェアについては、学生たちは、3 泊 4 日のルームシェア体験をこの上なく楽しみ、互いを知る機会として有意義に生かしていた。寝食を共にし、献立を考え共に調理したり、演習記録を書きながら一日を振返り学びを深める機会となっていた。しかしながら、2 人部屋を 3 人で使うグループもあり、必ずしも心地よい経験ばかりではなかったため、利用する部屋を日ごとにローテーションするなど今後は工夫が必要である。互いへの配慮と協力を通して、学生たちの団結力が深まり、後に続いた研修において各ファミリー宅へ散らばっても、心身の不調の際は自主的に連絡をとって助け合うことができていた。

初日からホームステイをして異文化に浸ることもそれなりの利益はあるが、初めの数日にルームシェアをすることは、チーム内の一致を育むうえで重要な役割を果たしたと考える。

今年度のモナシュ大学のプログラムも初年度とほぼ同様であり、学生たちは講義や施設見学について満足し高い評価を表していた。現地の看護学生との交流のスコアが低かったのは、「時間が足りなかった」「もっと話したかった」という不満の声があったためで、交流自体は大変楽しんでいたことがわかる。これは前年度の研修参加学生の評価と全く同じ

で、学生たちは同年代の現地学生との交流をことのほか楽しみにしていることがわかる。今後の海外看護研修プログラムの立案には、学生たちが現地学生との有意義で満足ゆく交流を増やし、相互に刺激を与えられるようなプログラムを開発する必要性が高いと言える。

Ⅵ. まとめ

今年度、本学の海外看護研修ではじめて実施した梅花女子大学オリジナル海外看護研修プログラムを中心に今回の研修を振返った。本学オリジナル・プログラムは、オーストラリアを題材として「多文化社会における看護ならびに社会文化システムの看護との関係性についての理解を深める」という国際看護学演習の課題を学生が達成するために大きく貢献していた。

大学のカリキュラム上、海外看護研修を実施可能な期間が限られていることや、主な研修先であるモナシュ大学のスケジュールとの兼ね合いから、研修期間中にオリジナル・プログラムを実施するタイミングの調整が難しい。しかしながら、各プログラムの学習上の意義が非常に大きいため、今後も学生の学習ニーズに合わせたスケジューリングを行い、一つ一つのプログラムを丁寧に計画し、参加した学生の人生に深く刻まれるような価値あるプログラム作りを目指したい。

Ⅶ. 今後の課題

2014 度の海外看護研修参加学生は 9 人であり、2013 年度の 4 人から大幅に増加した。それは、初年度の反省を踏まえ、初年度参加学生と教員が協力して海外看護研修の成果を学内で発信したことが功を奏したと言える。初年度もまた今年度も、参加した学生たちが口々に言うのは、「参加する前は不安でいっぱいで何度もやめようと思った。しかし参加した後に思うのは、こんなに素晴らしい体験ができるとは渡航前は想像できなかった。」ということだった。海外看護研修における成功体験は、学生の看護における職業的自信やキャリア形成に大きな影響を与える（Caffrey et al., 2003）。そのため、海外渡航に対して消極的なゆとり世代の学生たちの背中を押す努力は必要であり、彼らのニーズやペースにあったオリジナル・プログラム企画することは、参加を促すために非常に重要であることが分かる。今後も更に、科目担当教員の国内外のネットワークを用い、他大学の海外看護研修プログラム等の検討も踏まえ、より教育効果の高いオリジナル・プログラムの開発に取り組みたい。

謝　辞

2014 年度海外看護研修の実施にあたり、ご協力をいただきました学内・学外の諸先生方、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。また，11 回の渡航前英会話レッスンを担当して下さった食文化学科の上村幸弘教授に深く感謝を申し上げます。

補　足

本文中の学生の文章ならびに写真は、当該学生およびカウンターパートの許可を得て掲載するものである。

文　献

・Caffrey RA, Neander W, Markle D, Stewart B (2005) : Improving the cultural competence of nursing students: results of integrating cultural content in the curriculum and an international immersion experience. J Nurs Educ.May;44 (5) :234-40.
・Immigration Museum (2014) : Restrived June 28, 2014, from http://museumvictoria.com.au/immigrationmuseum/visiting/

・Monash University (2012): Monash at a glance. Restrived June 20, 2014, from http://www.monash.edu.au/about/glance/
・Nurse Christian Fellowship International (NCFI) (2014): About NCFI. Restrived June 27, 2014, from http://www.ncfi.org/.
・State Library of Victoria (2014) : Restrived June 28, 2014, from http://www.slv.vic.gov.au/